
裏の寿司屋 ～貴方の所にくるかもしれない？～

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏の寿司屋　　＼貴方の所にくるかもしれない？＼

【Nコード】

N2363V

【作者名】

白い黒猫

【あらすじ】

ある会社の昼前に、一人の男性が訪ねてくる。それがとんでもない事件の始まりだった？

(前書き)

私が勤めていた会社で、本当にあった出来事です。
貴方の職場にこの男性が現れたらどうしますか？

お昼休みまであと三十分チョットというタイミングで、その男は会社社にやってきた。

薄い頭髮に細身の身体の調理白衣に身を包んだ中年はフラツとした様子で入ってきた。視線で泳がせオドオドとした様子でギョロつと血走った目で、どこか異様である。フロアにいたみんなは何事かとその訪問者を見つめていた。

「裏の寿司屋でございます。助けてください！

実は家の馬鹿倅が、仕出し寿司を十四個を間違えて四十個と受けて作ってしまいました。

千二百円の寿司ですが、どうか五百円で良いのです！

どうか買っていただけないでしょうか？

お願いします」

男はヒロヒロとした震える声でそう訴え、深々と頭を下げる。恥も外聞もなく土下座せんばかりに頭を下げる男の様子は悲壮感さえ漂う。

（今日のお昼は寿司か、悪くないかもしれない。人助けになるし、かなりお得だし）

フロアの多くの人間はそう考える。緑の竹の模様のついた包装紙に包まれた二十六個の寿司は瞬く間に売れ、男は泣かんばかりにペコペコ頭を下げお金を受け取り去っていった。

そして昼休み、その寿司を買った者は、その包みワクワクとした気持ちで開けて驚く。

（カッパと干瓢だけ？）

どうみても三百円チョットの内容。

箸袋にも包みのどこにも寿司屋の名前がない。それに会社の裏に寿司屋なんてあっただろうか？ 会社の裏は住宅街が広がっていて、お店といったら団子屋とうどん屋くらいしか思いつかない。

なんとも地味な詐欺にあった事に気づいたものの、怒りよりも苦笑しか出てこない。その日は皆でチープな寿司ランチを妙に穏やかな空気で楽しんだ。

その後、豪雨等で外にお昼を買いにいくのが面倒な時。

「今日、裏の寿司屋きてくれないかな」

「裏の何屋でもいいけど」

社内でそんな会話が交わされるようになるが、裏の寿司屋は二度と訪れる事はなかった。

（後書き）

たしかにこの方法だと確実に作った弁当を売り切ることは出来ませんが、決して、真似をしないでください。

※鍛錬投稿室というサイトに力試しに同じものUPしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363v/>

裏の寿司屋 ～貴方の所にくるかもしれない？～

2011年10月7日20時58分発行